

平成 18～19 年度研究成果の概要

各年度の 研究成果目標	各年度の研究成果（成果の活用状況を含む）
<p>平成 18 年度</p> <p>① 流域生態系及び高解像度土地被覆データベースの構築</p> <p>② 人間活動による生物多様性・生態系影響評価モデルの開発</p> <p>③ 持続可能な流域生態系管理を実現する手法開発</p>	<p>平成 18 年度</p> <p>① メコン河流域全体を対象とした多時期衛星観測データを整備し、タイ東北部における 1990－2000 年の土地被覆変化に関する予察的な解析を行い、氾濫原や河川地形の現況把握を行った。</p> <p>② 対象河川に対して水環境シュミレーションモデルの導入と初期稼動を行った。メコン河流域全体の GIS 環境に対応する形で空間情報（土地利用、流域基盤、生物捕獲等）を収集した。</p> <p>メコンデルタの広範囲に生育しているマングローブ樹種の根圏酸化機能が底質中の物質代謝機構へ及ぼす影響を評価するため、国内外での野外調査および圃場での実験システムを構築した。環境影響評価に不可欠な水環境の情報データの取得とモデル化並びに好適生息地評価のための景観生態学的手法や河口域生態系への影響評価手法を開発するため、国内比較対照地である石垣島のマングローブ林とタイ北部及びメコンデルタにおいて予備調査を実施した。</p> <p>③ メコン河情報共有のため現地 NGO やカウンターパートとのネットワークを作った。主に淡水魚類に関する既存データ、またダム建設に伴って実施されたであろう環境アセスメントの報告書などを収集した。</p> <p>アジア国際河川生態系長期モニタリング体制の構築</p> <p>(1) 流域国のキャパシティ調査・向上とモニタリング手法の開発 水質、生物多様性（藻類・水生植物、水生無脊椎動物、魚類）、水循環解析、有害化学物質のモニタリングに対する流域各国のキャパシティ（経験、保有機材、人材など）調査を行い、研修と試験モニタリングをおこない、モニタリングマニュアルの作成と水質分析精度向上及び生物材料同定精度管理体制の構築を目指した検討を行った。</p> <p>(2) 生態系情報・モニタリングデータ共有システム構築 メコン川の水質や生物多様性に関する既存情報を収集、体系的に整理・解析を行った。また測定データの受領から利用までのプロセスが容易になるデータの共有・公開システムの構築の検討を行った。</p> <p>(3) 国際ワークショップの開催 当該研究担当者と流域諸国の関係研究者にて情報を共有し、上記について検討を行い基本的な合意事項を決定した。</p>

<p>平成 19 年度</p> <p>① 流域生態系及び高解像度土地被覆データベースの構築</p> <p>② 人間活動による生物多様性・生態系影響評価モデルの開発</p> <p>③ 持続可能な流域生態系管理を実現する手法開発</p>	<p>平成 19 年度</p> <p>① メコン河流域全体を網羅した自然環境（地質，土壌，植生，気候，水文など）および人文社会（行政界，人口，交通網，産業統計など）に関する空間データを整備するとともに、各要因の類似性に基づいた地域の類型化を行った。今後、類型地域ごとに、人為による環境影響の特性を整理、検討し、現地調査やモデルシミュレーションで得られた知見を一般化する。</p> <p>② 北タイ地域のメコン河本流および支流における河岸・河床地形、流速、水質、魚類相の現地調査を実施し、硝酸濃度が高くタイ支流からの流入と地形変化により pH や濁度が変動することを明らかにした。定期採水委託により水質のモニタリングを開始した。</p> <p>タイ，ウボンラチャタニ大学と連携し，メコン河支流ムン川の魚類相調査，水質調査，魚類の耳石解析を開始した。同大学との間で委託契約を結び，魚類採集をともなう定期モニタリングを行っている。</p> <p>多岐にわたる海外現地調査活動を通し、モデルシミュレーションに資する一次データ取得を始め、継続的なデータサンプル輸入体制・研究組織間のネットワーク等を構築した。</p> <p>③ 日本、タイの環境 NGO 等とメコン河流域住民との環境影響評価に関するヒアリングを行い問題点の抽出を行った。メコン河上流の中国国内で環境ジャーナリスト、研究者による現地視察を行った。</p>
--	--